

要望書

私たちは「戦争と女性の人権博物館」の建設を待ち望んでいます！！

私たちは、韓国で光復会などの独立運動関連団体により、ソウル市の西大門独立公園内に建設予定の「戦争と女性の人権博物館」の建設許可撤回を求める声明が出されたことを知り、大変衝撃を受けています。加害を与えた日本に生きる者として、「慰安婦」問題の正当な解決がなされないがために、このような主張が被害女性の生きる地で吹き出したと思うと、いたたまれない気持ちです。

声明によれば、撤回を求める理由は、1、博物館の建設は没歴史的な行為で、独立運動家と独立運動を汚す「殉国先烈に対する名誉毀損」であり、2、日本人に対し、先祖の悪行に対する反省を促すどころか、むしろ嘲笑を提供する結果を招き、3、青少年に正しい歴史認識よりも、「我が民族は反日闘争より日帝による受難のみ受けた民族」という歪曲された歴史認識を植え付けると語っています。

なぜ、「慰安婦」被害女性たちの尊厳回復のため、女性の人権を守り育てるための博物館が「殉国先烈に対する名誉毀損」「嘲笑を提供する結果を招く」「歪曲された歴史認識を植え付ける」ことになるのでしょうか。そこには、性暴力を受けた女性たちの苦痛も、真の謝罪・補償を怠ってきた日本政府への怒りも感じられず、むしろ、被害女性に対する抜きがたい蔑視と根深い差別意識が感じられます。このような排除の眼差しが、同郷に生きる被害女性に苦痛の沈黙を強い、「汚れた女」という烙印を押してきたのではないのでしょうか。これでは、植民地支配を正当化し「先烈たちによる独立運動」「抗日抵抗」を「暴動」「暴徒」と決めつける日本の右翼・歴史修正主義者たちが、「慰安婦」に対して「慰安婦は商行為」と決めつけた主張と変わりません。光復会が闘う相手は、「慰安婦」問題を解決しようという韓国挺身隊問題対策協議会や被害女性たちではなく、日本の右翼や歴史修正主義者たちではないのでしょうか。

日本軍「慰安婦」被害者は、植民地支配と侵略戦争の被害者であるのみならず、日本政府の責任否定に対して立ち上がり、証言をはじめた人権回復闘争の当事者です。1991年8月「日本軍に捕らえられ、動物以下の扱いをされた。生きた証人がここにいる」と声を上げた金学順さんの勇気は、韓国をはじめ同じ被害を受けたアジアや世界の女性たちに人間の尊厳を取り戻す勇気を与えました。そして、多くの「慰安婦」被害女性たちが沈黙を破り、その被害を明らかにし、正当な解決を求めて立ち上がりました。被害女性たちの闘いは、3・1運動をはじめとする抗日独立運動に共通する歴史に残る女性解放運動です。

「慰安婦」への性暴力は、独立運動関連団体の方たちが考えているような「被害者の恥」「民族の恥」の問題ではなく、人間の尊厳と女性の人権を踏みにじる戦争犯罪です。その記憶を封印し被害者を社会の周辺に追いやるのではなく、何があったのかを明らかにし、犯罪の責任を明確にし、二度と同じ過ちが繰り返されないように真の謝罪・補償と歴史認識を育てていくよう努力することこそが、「次世代の青少年に正しい歴史認識」を継承することになるのだと思います。

私たちは、このような独立運動団体の圧力にもかかわらず、博物館の建築許可を出したソウル市の英断を支持し、歓迎します。そして、被害女性たちに再び悲しみを与えることがないよう、ソウル市が今後も、圧力に屈することなく「戦争と女性の人権博物館」建設実現に向けて、引き続き力を尽くしてくださるよう求めます。

